

国立国語研究所学術情報リポジトリ

〈受賞紹介〉 今帰仁方言のアクセント体系

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小川, 晋史 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000694

〈受賞紹介〉

沖縄言語研究センターでは、若手研究者の育成をはかるため、琉球語に関して優秀な論文をしあげた大学の学部学生、大学院生、研究生、あるいはそれに準ずる資格のある人に「仲宗根政善記念研究奨励金」を授与する制度を設けています。小川氏は、神戸大学に提出した博士学位論文『今帰仁方言のアクセント体系』を中心とした計6編の論文が高く評価され、第24回（2011年度）の研究奨励金を授与されました。

今帰仁方言のアクセント体系

小川 晋史

国立国語研究所 時空間変異研究系 プロジェクト研究員

著者が神戸大学に提出した博士学位論文『今帰仁方言のアクセント体系』が受賞の対象となった。以下はその論文の概要である。

沖縄島北部で伝統的に用いられてきた今帰仁方言のアクセント体系を明らかにし、その方言アクセントにかかわる現象を詳しく分析することによって、1つの方言にとどまらない知見を得ることを目的とした論文である。全体としては、従来の広く浅く多くの方言をという琉球方言のアクセント研究ではなく、1つの方言での深さを重視した内容である。

7章からなる論文だが、本格的な議論をしたのは2章から6章にかけてである。

2章においては先行研究で意見が分かれている点および検証が十分でない点を中心に議論した。ここでの大きなトピックは2つあり、今帰仁方言の韻律単位がモーラなのか音節なのかという問題の解決が1つであり、もう1つは今帰仁方言がピッチの上昇が重要な昇り核の体系を持っていることを示すことである。韻律単位の問題については、今帰仁村のエイサー楽譜における特殊モーラに対する音符付与率を分析した結果から、モーラが韻律単位であるという結論を得た。今帰仁方言から得られた結果は、韻律単位が音節であることが知られている鹿児島方言とは大きく異なったものであると同時に、韻律単位がモーラであることが知られている東京方言に酷似していたからである。昇り核の問題については、ピッチの上昇と下降を複数の観点から比較することでピッチ上昇のほうが高いステータスを持っているという結論を得た。

3章においては『沖縄今帰仁方言辞典』（仲宗根政善 [著]）に記載されたアクセントを再分析した。数千の単語を抜き出して統計的な観点から分析した結果として、記述的な定義としては以下のようなになるという結論を得た。

(1) 今帰仁方言の3型アクセント

A型：1モーラ目または2モーラ目から高いピッチになる。

B型：3～5モーラ目から高いピッチになる。

C型：語頭モーラが高く、直後に義務的下降を伴う。

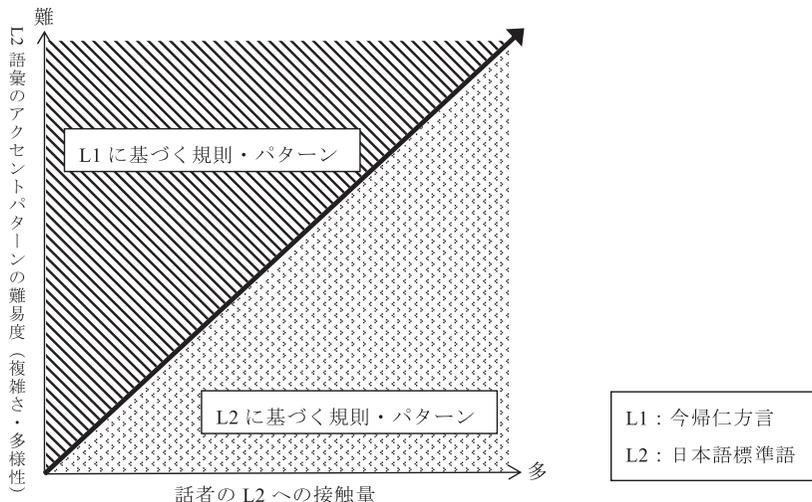
そして、B型が最も無標であって、C型が最も有標なアクセント型であると指摘した。語数および複合アクセント規則の適用割合を分析することによって導き出した結論である。

4章においては今帰仁方言のアクセントにおいてはフットの概念が重要であるという先行研究を踏まえ、フットとアクセント付与について議論した。最適性理論の観点で今帰仁方言の3型アクセント体系を分析し、他の下げ核の言語やストレス言語に用いるのと同じ制約を用いて昇り核の言語である今帰仁方言も分析できることを示した。アクセントの音声的な実現についての議論では、モーラに対して付与される High と Low の中で義務的なものとそうでないものを分別することで、今帰仁方言内でのピッチパターンの揺れや個人差が予測できることを示した。また、それらの揺れはアクセント体系全体でみると問題にならない（＝弁別性に影響を与えない）揺れであることを示した。今帰仁村西部と東部のピッチパターンの違いもフットの概念を用いることによって説明できると主張した。

5章においては標準語語彙を用いたアクセント調査の結果に基づいた議論をした。今帰仁方言を母語とする話者の標準語語彙のアクセントには、伝統的方言の影響が色濃く表れることを示した。具体的には、聴覚印象などの特別な条件がない場合には伝統的方言の語彙で無標なB型アクセントが現れること、さらにはC型アクセントが伝統的方言の語彙と同様に最も有標であることを示した。

同様の標準語語彙のアクセント調査を若い世代、すなわち伝統的方言を母語としない世代に対して行ったところ、かなり標準語のアクセント体系に近い体系を獲得していることがわかった。その一方で標準語と異なるアクセントで発音される語彙を分析した結果、標準語で生産性の高い規則を持つ語彙（「名詞に対する形容詞・動詞」および「漢語に対する外来語」）から順に習得されているという結論を得た。5章で得られた内容を簡単に図示すると以下のようになる。

(2) アクセント変化・習得のモデル



6章においては今帰仁方言のアクセント体系を周辺の諸方言と比較し、沖縄島北部における祖語のアクセント体系を推定した。そしてその推定は、先行研究で指摘されている琉球諸方言に独自の類別語彙によって証拠づけることができると主張した。さらに、今帰仁方言の大きな2つの特徴、すなわち「Rhythmic Lengtheningの存在」と「式がない（失われている）体系」の2つが独立したものではなく、互いに関係していると推定した。すなわち、式の体系が失われるときにそれまでのコントラストを保つために Rhythmic Lengthening が発生したという分析が可能であると主張した。アクセント型の定義が変わっても、それまでのコントラストを維持しようとする言語一般に通じる力が作用した結果と考えたのである。

小川 晋史（おがわ・しんじ）

国立国語研究所時空間変異研究系プロジェクト研究員。博士（文学）（神戸大学）。日本学術振興会特別研究員（DC2）、同（PD）を経て、2011年6月より現職。

主な著書・論文：Sino-Japanese word accent and syllable structure（『音韻研究』7, 2004）、「日本語の諸方言における二字漢語アクセント—単純語と複合語の狭間で—」（『漢語の言語学』, くろしお出版, 2010）、「これからの琉球語に必要な表記法はどのようなものか」（『日本語の研究』7(4), 2011）。

社会活動：日本方言研究会事務局員。